第3段階―（太田谷地館ＳＩ157・158[註29]、高屋館ＳＩ03[註30]）土器組成の上では、第2段階土器群と変わるものではない。従って、本期は第1段階を先行させることができるものの、第2・3段階はまとめて10世紀中頃（？）～末の年代を想定しておきたい。

〔後Ⅱ期〕：およそ11世紀（妻の神ＩＳＩ003・110[註31]、はりま館Ⅱ期、下沢田、太田谷地館（第1次[註32]）土器組成は、土師器甕Ⅱ・Ⅲ類が主となり、土師器坏Ⅱ類、鍋、須恵器はごく少量、あるいは認められなくなる。土師器把手付土器が現れる。妻の神Ⅰに土師器坏Ⅱ類が伴うことから、本期の中でも古手の部類に入るのかもしれない。

数多くの仮定と問題点の上に立脚しているとは言え、土器の形態・調整技法、器種の消長から一応の流れは追えるものと考えている。これに従うと、はりま館Ⅰ期は10世紀中～後葉、はりま館Ⅱ期は11世紀代に入ると想定される。ただ後Ⅰ・Ⅱ期境界の時期、後Ⅱ期の下限時期は現段階では明確にできない。

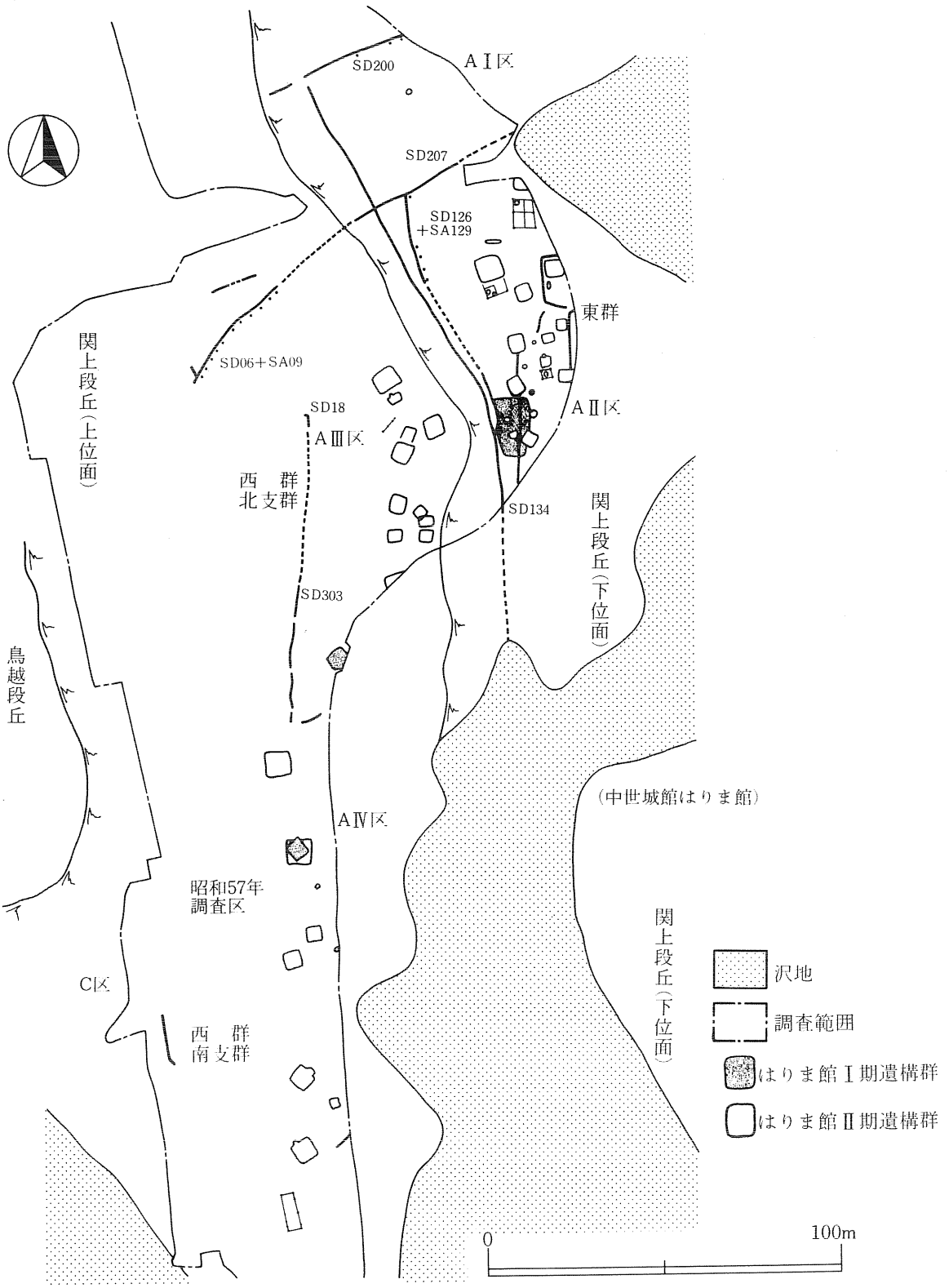
5　「はりま館」集落の景観と終焉（第420図）

10世紀中～後葉のある時期、「はりま館」南端部（AⅣ区）に小規模の集落が営まれる（はりま館Ⅰ期）。調査範囲内では2軒（ＳＩ310・323）確認しているが、東側調査区外の段丘（上位面）縁辺部にも何軒か存在していた可能性はある。この2軒は、竪穴住居跡の主軸方位、カマドの構築方法から見れば、ほぼ同時期に併存していたと考えられる。

また次のⅡ期に伴うＡⅡ区溝状遺構に切られる畑畝跡は、大湯浮石堆積後の耕作跡であることが明らかであり、本Ⅰ期に伴う遺構とも推定できる。そこで想像をたくましくすれば、はりま館Ⅰ期は、段丘上位面を居住地とし、下位面を耕作地として利用していたと言えるであろう。

11世紀に入ると、1つの定型的な集落としての形をなすようになる。前述の2軒以外の遺構はこの時期（はりま館Ⅱ期）に含まれると考えている。果たしてⅠ期とⅡ期は継続して営まれたのか否か、これを明らかにはできない。しかし昭和57年調査のＳＩ004出土土器は、Ⅰ期の特徴（土師器甕Ⅰ類の存在）とⅡ期の特徴（土師器甕Ⅱ類、把手付土器などの存在）を具備しており、両期をつなぐ遺構であったのかもしれない。

集落の北端には東西方向の溝状遺構・柱列（ＳＤ207、ＳＤ06・ＳＡ09）が配され、これに接続し南北方向に南下する溝状遺構・柱列（ＳＤ126・ＳＡ129、ＳＤ134）で集落が2分される。すなわち、大きくは東側の一群（東群―ＡⅡ区）と西側の一群（西群―ＡⅢ・Ⅳ区、昭和57年調査区）であり、後者は更に北側の支群（北支群―ＡⅢ区、AⅣ区ＳＩ300を含む）と南側の支群（南支群―AⅣ区、昭和57年調査区）に細別できる。各群・支群は、更に細分される可能性を残しているが、出土遺物の量と遺構間の重複の少なさから、竪穴住居跡の主軸方位などでの検討を加えても、確たる類別はできなかった。従って各群・支群にも時間的幅を見なけ



第420図　平安時代の遺構配置と地形の関係

ればならないが、既述のように、遺構の重複・配置状況から、区画施設が機能を果たしていた、言い換えれば規制の及んでいた期間内に営なまれた集落であったとすることができよう。

また集落内での、生業という点から見ると、東群と西群では明らかに様相を異にする。東群では、区画施設内に精錬あるいは製錬に係る遺構が少なくとも3箇所に認められ、そのいずれもが竪穴住居跡と密接な関係を有し、掘立柱建物、溝状遺構を介在とし、両者一連の施設としてその役割を担っていた可能性が強い。一方の西群では、鉄製品、フイゴ羽口などの出土はあるものの、鉄滓、鍛造薄片など直接的に製鉄に係る遺物をほとんど確認できず、積極的に本群内で製鉄が行われていたとは想定しづらい。このことから、東群は鉄生産に係る集団の居住・作業区域であったと想定でき、西群はその他の生業部門を担っていたことになる。それは明らかではないが、本群の北側、西側に広がる無遺構域の存在に注視しておく必要がある。Ⅰ期における畑作の想定は、Ⅱ期の無遺構域にもその存在を想起させるものがある。

はりま館Ⅱ期の下限時期、すなわち「はりま館」集落の終焉はいつであろうか。現段階では漠然と11世紀としか答えられない。少なくとも次代中世期の遺構・遺物が確認できないことから、この地を離れたことは確かであろう。東群の南側には空堀と考えられる沢を隔てた平坦面が存在する。ここは中世城館はりま館として周知されているところであり、沢で画された要害の地である。発掘調査等がなされていないので、仮定でしか言えないが、同様の立地条件を示す集落の存在－たとえば太田谷地館跡など－及び、11世紀という時代背景から「はりま館」集落の人々もこの地に移動したと想定できそうである。

註1　高橋　学「竪穴住居と掘立柱建物が併列して構築される遺構について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号　1989（平成元年）

註2　高島成侑「発茶沢（1）遺跡の建物跡について」『発茶沢（1）遺跡Ⅳ』青森県教育委員会　1989（平成元年）

註3　高橋　学「区画施設を伴う古代集落遺跡について」『よねしろ考古』第5号　1990（平成2年）

註4　秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第178集　1989（平成元年）における福田・十二林遺跡など

註5　鹿角市教育委員会『下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料27　1984（昭和59年）

註6　秋田県教育委員会「下乳牛遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ』秋田県文化財調査報告書第119集　1984（昭和59年）

註7　秋田県教育委員会「北の林Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第89集　1982（昭和57年）

註8　秋田県教育委員会「案内Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58年）

註9　秋田県教育委員会「歌内遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第88集　1982（昭和57年）

註10　秋田県教育委員会『胡桃館埋没建物遺跡第３次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第22集　1970（昭和45年）

註11　秋田県教育委員会　『土井遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第111集　1984（昭和59年）

註12　秋田県教育委員会「袖ノ沢遺跡」『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』秋田県文化財調査報告書第169集　1988（昭和63年）

註13　秋田県教育委員会「上の山Ⅱ遺跡」『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第114集　1984（昭和59年）

註14　秋田県教育委員会『腹鞍の沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第97集　1982（昭和57年）

註15　鹿角市教育委員会『高市向館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料22　1982（昭和57年）

註16　大野憲司「太田谷地館跡について－空堀を持つ平安時代後葉の集落跡－」『よねしろ考古』第５号　1990（平成２年）

註17　秋田市教育委員会　秋田城跡調査事務所『昭和61年度秋田城跡発掘調査概報』　1987（昭和62年）

註18　註３に同じ

註19　秋田県教育委員会『鳥野遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第49集　1978（昭和53年）

註20　桜田　隆　「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相（Ⅰ）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第２号　1987

註21　註15に同じ

註22　秋田県教育委員会「中の崎遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』秋田県文化財調査報告書第106集　1984（昭和59年）

註23　秋田県教育委員会「源田平遺跡」『鳥野遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第49集　1978（昭和53年）

註24　鹿角市教育委員会『御休堂遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料19　1981（昭和56年）

註25　鹿角市教育委員会『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26　1984（昭和59年）

註26　秋田県教育委員会「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58年）

註27　秋田県教育委員会「駒林遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第91集　1982（昭和57年）

註28　秋田県教育委員会「上葛岡Ⅳ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第91集　1982（昭和57年）

註29　秋田県教育委員会「太田谷地館跡第２次調査」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第183集　1989（平成元年）

註30　1989年秋田県埋蔵文化財センターで調査、1990年３月に報告書刊行予定。

註31　秋田県教育委員会「妻の神Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第107集　1984（昭和59年）

註32　秋田県教育委員会「太田谷地館跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第172集　1988（昭和63年）